

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

か  
ん  
む  
す  
た  
ち  
の  
夜



ペンション○○○○へようこそ。

お客様のお名前は提督様。おつれ様は鈴谷様ですね。

「はい、そうで—す！」

隣でぼくの腕にまとわりつきながら、鈴谷が元気な声をあげた。  
いつも以上に、はしゃいで見える彼女の薬指には、  
銀色のケツコン指輪が輝いている。

ペンションの主人は愛想よくニコニコと優しい微笑みで、  
ぼく達を迎え入れてくれた。  
新婚旅行にこの雪山のペンション群を選んだぼく達を…。

「…はあ寒い寒い。早く中へ入りましょう」

そう言ってぼくと鈴谷の間をかき分けたのは、無愛想な表情の  
浜風だった。

「うむ、そうだな。とっとと雪山での訓練に入りたい」

それに連れ立って建物の中に入っていきのが磯風。

「司令官っ！朝潮、お荷物、お部屋にお運びしますね！」

ピシピシと生真面目な動きで働いているのは朝潮、

「ああもう司令官、邪魔っ！そこどいてったら！」

ぼくを邪険にしてくる満潮。

「あ—もう冷えたあ…私、早く温泉に入りたい—い！」

と、ぼくを押しつけていく瑞鶴に、

「…提督、鈴谷さんも早く中へ。雪山はすぐに日が暮れちゃいます」

とその姉の翔鶴。

続々といつものメンバーが、木製の建物へとなだれ込んでいく。

そう、今回は決して新婚旅行なんでもものではなく、  
鎮守府の休暇を利用した合宿のようなものだったのだ。

「ぶ—ぶ—！提督と三人っきりがよかったなあもう！」

不満げにそう漏らしながらも、鈴谷だって楽しそうな顔をしている。

「…ま、部屋に三人っきりでこもっちゃえばいいか。ね、あなた」

腕を絡めてくる彼女とは確かについ先日、『ケツコン』したばかりだ。

それは他の皆も周知のことだった。

「ああそうだな。——じゃあ早速、雪山ックスでも…」

「さ—で、スキーするぞ—！今日は遊んでもいいんだよね—？」

飛び跳ねるように駆けていく鈴谷の背中を見送る。

「…ま、いっか」

これから皆とのひとときが始まることを考えると、ぼくの胸も高鳴っていた。

艦娘たちと雪山での楽しいバカンス。

きっと騒々しくも楽しい時間になるだろう。

……その時はまだ、これから起こる惨劇を僕は知るよしもなかったのだ…。

か  
が  
ん  
む  
す  
た  
ら  
ち  
の  
夜

その晩、夜遅くにぼくらは鈴谷の部屋で待ち合わせをした。彼女はその余裕を見せつけるように振る舞ってはいたが、緊張は隠し切れず、声が震えている。

ぼくはそっと、そんな鈴谷の服を脱がせていった...

ふふ

二人つきりだね、提督 ♡

今晚は大事な夜だから、ちゃんとムード出してよね、まずはキス—



提督っ てーとくっ...

ごめん、鈴谷、もうっ... イく...ツ ♡



俺もっ…  
孕め鈴谷ッ

また中つ…!!  
すぐそうやって

んっ♡

やっ♡

アッ

もう…  
ばかあ…

あっ♡

んっ♡

全然、射精  
止まらない…  
ほんとに  
孕ませる気だ…

すき♡

んっ♡

ケツコン  
してくれたから  
許すけどっ…

んっ♡

浮気したら  
許さないから

しかし、  
こういう所で  
制服着てると  
コスプレみたい  
だよな、やっぱり

提督ってさ、  
コスプレ  
好きだよな

んっ♡



夏だつてさあ——

…ねえ、提督う  
どうして急に  
部屋に戻つたの？

まだ屋台だつて  
回つてないし、  
もうすぐ花火  
だつて——

ここからでも  
打ち上げ花火  
見えるぞ？  
下になるか？  
それとも横に…

ま  
まだ  
お祭りの最中  
なのに…

やあ

私、その映画好き  
なんだから  
やめてっつ

あ



提督さん、ちーつす！  
鈴谷だよー  
メリクリけもみみ  
ばーじょん！

おお  
さすが鈴谷  
分かつてる！

もうっ  
いきなりっ

なっ、  
中はダメ  
だつてばっ…

もおお…  
出来ちゃうって  
ばあ…！

やあ…

あー  
あー  
あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー  
あー  
あー

「……近寄らないでください」

燃え上がるような、そして冷めたような瞳で彼女は『男』を睨みつけていた。

「浜風。彼は、この磯風が呼んだのだ」

もうひとりの少女が、警戒を強める銀髪の少女の逃げ場を塞ぐように後ろから抱きすくめる。

「なっ…何を…!? 磯風——」

狼狽する浜風と呼ばれた少女に、『男』は舌なめずりをしながら近づいていく…。



司令との  
婚約にあたって、  
色々学ばないと  
いかんのでな

性処理の熟練  
プロ  
だという  
浜風に教えを  
乞うことにしたのだ

誰が  
プロ  
熟練だ!!

かっ

まあまあ  
アイス  
買ってやるから  
教えてやってくれ

暖房の効いた  
真冬のペンションで  
食うアイスは  
格別だぞ

これは  
経験を積み  
装甲を鍛えあげた  
兵士のみが行える  
奉公だ、  
磯風も励むがいい

善処する

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい



さすが浜風プロ…  
気持ちよすぎて  
我慢出来ん…

だから  
プロはやめっ—

よしっ  
浜風、出すぞっ

っ…！  
あっッ…

グッ

浜風  
エッコ(提)

浜風おまえ  
卑猥だな…(磯)

あ、  
あんまり  
見ないで…

っ…

プロ穴もいいが  
やはりこの  
未熟穴も  
たまらんな…

おお…  
中、きつつ

磯風、しっかり  
見とけよ

んっ…！

ん…

うっ

浜風、こつちもだいが小慣れてきて気持ちよくなってきただろ？

そそんなコトっ……！

わっ、私は戦う為のっ……

艦娘であつてっこんなコトするたけにっ……！

いや……気持ち……いい……

提督に触れられただけで……っ

ながっ……いやあ……



磯風は  
こつちの方も  
キツキツだなあ  
いいぞいいぞ

ん？  
いつもの  
余裕の笑みは  
無いようだが？

お  
磯風、全部  
丸見えだぞ

くっ  
ころすつ！

つ司令……  
笑ってるうちに  
侮辱は  
やめようなっ……

そのテンプレ  
似合うねえ

こつ  
子供が出来たら  
どうするつもり  
なんだっ……!!  
戦えなくなつて

デキたら  
花嫁修業  
開始だな

……覚えていろ  
料理の鍛錬に  
付き合ってもら  
うからなっ……!

ヒエッ

やっあ

もう  
やめっ

あっ

くう……  
くう……

うう



磯風、奥で出すぞッ

司令っ…  
ほ  
本気なのか…!!

あっ♡

その腹に  
子種いっぱい  
吐き出してやる!

本当に  
この磯風を  
孕ませる気なのっ

あっ♡

うっ♡



やめっ…  
止めろっ  
どれだけ注ぐ気  
っ…だ

こんなのっ  
絶対孕む  
じゃないかっ…

満たされて  
いくのになん  
だこの敗北感  
は…

ふう…♡

知らないからなっ  
これ以上戦力が  
落ちてもっ…!!

あっ♡

あっ♡

その惨状に、鈴谷は息を呑んだ。

「浜風…？ 磯風…？」

部屋の中から立ち込める、すえた男女の匂い。

だがそこに横たわっていたのは、ほぼ裸の少女二人だけで男の姿はもうない。だが、そこで何が行われたのかは一目瞭然だった。彼女自身、先程まで愛する男に抱かれていたのだから。

「一体何が…いやっ、誰がこんな…!？」

うろたえる鈴谷に、半身をけだるげに起こした磯風が応じる。

「落ち着け鈴谷、別に気にする必要はない」

「落ち着けたって乱暴されたんじゃ…？」

え、あ、もしかしてこれってまさか…?!」

悲しい事に、真っ先に愛する男のにやけヅラが脳裏に浮かぶ。

「……いや、うん違う。違うぞそれは。なあ、浜風」

磯風が珍しく、たどたどしく答える。

隣でそんな様子を呆れたように見ていた浜風が、はあと大きくためいきをついた。

「……ああそうだ、提督じゃない。その…明かりが落とされて顔が見えなかった。『犯人』はわからない」

『犯人』。

とりあえず彼の疑いは無くなり、一安心はした。だが、彼女たちをこんなめにあわせた真犯人がこのペンション内にいるのだ。

艦娘といえど、艦装が無ければただのひ弱な女性。

普段から男性の助平な視線を受けてきた(ほぼ提督からだが)

彼女たちにとって、これはありえない事件ではなかったのだが…。

「——私、提督と一緒に犯人を探す」

怒りで全身が震えていた。

得体も知れぬ『男』の存在は恐怖と不安を生んだ。

しかし同僚である少女たちの痛々しい姿は鈴谷に、怒りと悲しみを与えた。

「ま、待つて鈴谷。それは…ちょっと」

浜風が目をそらして、部屋を飛び出していこうとする鈴谷を止める。

…きっと、私のコトを心配してくれているのだろう。

彼女の優しさは、決意と覚悟を固めさせた。

「きっと私が真犯人を突き止めてみせるわ!!」

こうして鈴谷の探偵物語と、長い夜が始まったのだった…。

「…ねえ、なんで私までこんなカッコしてポーズまで決めてなくちゃいけないのよ。あと、なにこのしっぽ」  
「これが命令なら…従う他ないのよ満潮！」  
コスプレ少女が二人、『男』の前であられもない姿を晒していた。

彼女たちにはもはや、抵抗する気力も残っていなかった。  
まだ幼く可憐なその肢体に、汚れたオスの魔の手が伸びていく…。



かわいいなま  
朝潮ちゃん！

おつき...  
司令官っ  
司令官っ

あつ  
ありがと...  
ございますっ

あつ...  
あつ...  
あつ...

かわいいなま  
朝潮ちゃん！



...ちよつと  
痛いけど、  
司令が喜んで  
くれてるっ！

うれしいです、  
司令官っ

かわいいなま  
朝潮ちゃん...

ふう

んっ

あつ...  
あつ...  
あつ...



司令官っ  
司令官っ

あっ♡

また見境なく  
えっちなコト  
ばっかり…  
ぶったく…

……朝潮  
なんか、気持ち  
良さそう…

…なに？  
何か出てる  
の……??

なんかっ  
熱いの出てっ…  
しれーっ

えっは、はいっ  
気持ち  
いいですっ

あっ…♡

ドク

せ  
いせ  
っ♡

ドク



…司令官が  
出してくれたの  
いっぱい  
溢れてきてる、  
……

うっ♡

満潮の中にも…  
発射するつもり  
なんです…

いたっ…

…ちよっ、  
落ちちゃうから  
ちゃんと  
支えてよっ…もう

ふう…♡

ドク

んっ♡

んっ♡

ドク

ドク





んっ♡

私は司令官の  
赤ちゃんなんて  
ぜつつたい  
産まないんだからっ

あっ♡

いつ  
言っとくけど  
中に出したら  
倍殺しだからねっ!!

やっ♡

ちよつと  
聞いているの!!  
ちよ……

とと  
とと  
とと

うっ♡

んっ♡

んっ♡

う  
ウソツ  
勝手に中つ…に!!  
いつ  
意味ワカンナイ!!  
何考えて

ばかあ…

あっ♡

とと  
とと  
とと

「でも一体、誰が…？」

勢い込んで飛び出してきたものの、皆目検討もつかない。

鈴谷は廊下に立ち尽くして考え込んでいた。

このペンションには艦娘たち以外にも、数人の男の宿泊客がいた。

必然、容疑者は彼らになるはずなのだが…。

怪しいといえば全員怪しく見えてくる。

私達がここを訪れた時、もはや慣れてしまったが案の定、

彼らの好奇の視線を全身に浴びた。普通の少女のそれと何ら変わらぬ

鈴谷らの体をいやらしい目で舐め回すように眺めていたのだ(多分)。

「どうした鈴谷？ ハトが豆食ってるような顔して」

のんきな様子で向こうから提督が歩いてくる。

「それ、普通にハトみたいな顔してたってこと？ そんなことより、提督——」

眼の前の『旦那』の顔を穴のあくほど見つめてみる。

考えたくはないが、彼も容疑者の一人なのだ…。

いや、信じよう。そうしないと推理を始めることすらままならない。

そうだ、提督にも相談して二人で犯人を見つけるのだ！

鈴谷は提督に、最初の被害者ふたり、そして新たな被害者……

年下の…可愛い後輩ふたりの惨状を話して聞かせた。

彼は大げさすぎるほどビックリしていたが、それほど許せなかったのだろう。

怒りの形相で、「犯人を見つけてみせる！ 提督の名にかけて！」

そう宣言してくれた。

まずは聞き込み、証拠探し、ペンションの隅から隅まで。

だが目撃情報の一つもないどころか、艦娘のみんなまで話を聞こうとすると

複雑な顔で目をそらして答えてくれなかった。

何かがおかしい……。これはきっと、単純な事件ではないのだろう。

だけど、提督と二人で力を合わせて必ずこの謎を解いてみせるのだ。

二人の最初の共同作業なのだ。

「……ひょっとすると、バナナのトリックかもしれないな」

提督の推理が冴え渡る。なんとバナナを使うと、衣服をバラバラに

切り裂けるというのだ！ しかも肌に薄皮一枚傷をつけず、

女を全裸にしてしまうらしい。

その技を、「かまいたち」と呼ぶことを教わった。

ヘタクソな関西弁で同人誌のキャラモデルの勧誘をしてくる娘や、

死んだフリをして話を聞いてくれない娘、

何故か提督に殴りかかる娘まで現れたが、確実に、事件の真相へと

迫っているという確信が、鈴谷にはあった。

そう、犯人は——

か  
の  
か  
ま  
い  
た  
ち



五航戦☆姉妹のサンタさんコスプレ  
姉の翔鶴も妹の瑞鶴も満更ではないようだ。  
…もはや残り時間は少ない。





あなた  
どうですか?  
気持ちいいですか  
.....?

んっ♡

やっ♡

んっ♡

んっ♡

ぬっ♡  
ぬっ♡  
ぬっ♡  
ぬっ♡  
ぬっ♡  
ぬっ♡

翔鶴姉!  
そんなに  
しなくていいってば!  
こんな変態提督につ



そんな冷たいこと  
言うなよ、サンタさん  
「愛してる♡」くせに♡

なっ...  
あ、あれは  
気の迷いと  
いうか...

って勝手に  
始めるなあっ!  
あんっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

あっ♡

かぶ♡

らめえ♡……♡

きもち♡

やあ♡

瑞鶴……俺のこと、愛してるか？

んっ……♡

提督さんっ♡  
提督さんっ♡

あっ♡

翔鶴姉に見られてるのにおお……気持ちいいよ……

ほら瑞鶴、もつとくっつけ肉薄しろ！

うんっ♡  
う……んっ♡

あ♡

あ……また中……そろそろ赤ちゃん……出来るのかなあ……♡

あ……♡

愛してないおっ♡

あ……♡

あ……♡

あ……♡

あ……♡

あ……♡

あ……♡

あ……♡

あ……♡



大丈夫ですからからっ  
動いてください  
あなた

んっ♡

きもちいい  
ですか？あなた  
あっ♡

んっ♡

翔鶴姉……  
やつぱり  
おつきい……

あなた♡

んっ♡



提督の……  
おちんちんが  
私の中で  
暴れてっ

痛い……♡

んっ

うれしい  
うれしい♡

あっ

愛してます  
あなた♡

うっ♡

あなたっ  
あな……たっ♡

んっ♡  
あっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



貴方が望むなら  
私、  
産みますからっ…

提督…っ  
いつでも  
中に…っ

うむ  
翔鶴、  
出すぞッ

あっ

あっ…



わ…  
わあ…こんな  
だったんだ私も  
さつきまで…

翔鶴姉も今、  
中に  
出されてるんだ…  
…提督の…精液

ん…

ん…

っ…

ん…

ん…

「ぼくは背後に気配を感じて振り向いた。  
ボールかストックのようなものを構えた鈴谷が  
廊下に立っている。

「鈴谷…」

「浮気者！！」

嫌悪に満ちた表情を浮かべ、鈴谷は主砲を突き出した。

予想外の行動に、ぼくはなすすべもなかった。

体が、焼ける。

痛くてたまらない。

だらだらと鼻血が垂れていく。

目の前にはただ、赤。

僕の鼻からあふれ出す血の赤。

最後に思ったのは、

もっと遊びたかったなあ、ということだった。

肢体の中でただ一人。

ぼくは鈴谷を愛していることに気づいた。

……鈴谷……。

か  
ん  
む  
す  
た  
ち  
の  
夜  
終





## あとがき

というわけで本作品いかがでしたでしょうか？

残念ながら今回のお話は提督のバッドエンドで終わってしまいましたが、

竿役は何度でも復活するので大丈夫なのではないでしょうか！

どうも虹元ひろkです。元ネタは有名な名作ノベルゲーです。大好きです。

冬場になると郷愁のようなものと同時によく思い耽ります。

ふと立ち寄ったお店でソフトを見つけて、「たけえ！」と嘆きながらも即買って、

クリスマスイブの夜に徹夜してコンプリートしました。イイ思い出ですね…

涙が出ます。

それではまた、たぶん四日間開催の夏コミか別イベントかインターネットツで！

感想とかSNS等でお伝え頂けるととても嬉しいノデ！

2018.12 『虹元少女』虹元ひろk

### 奥付

サークル「虹元少女」

発行日 2018年12月31日

発行者 虹元ひろk

連絡先 [hirokanu@hotmail.co.jp](mailto:hirokanu@hotmail.co.jp)//Twitter:@nizi\_hirok

謎code: kanmusuheisay

印刷 booknext 様

スペサン: 結城結 [pixiv.me/yu-yuuki](https://pixiv.me/yu-yuuki) @uki\_uu



虹元少女

two-dimensional girls

2018 winter  
Kantai Collection funbook

